

# 製本のススメ

Vol. 35

年末年始と重なって忙しさも倍ですね。世間ではインフルエンザも大流行です。体調の管理は、ぜひとも入念にしておかないと、せつかくの冬休みを寝て暮らすことにもなりかねません。うがいと手洗いは基本ですね。

今回は書籍印刷のお話

この頃 上製本の依頼が増えてきてありがたい事ですが、この書籍を印刷する時聞きなれない寸法や言葉が出てきますので、幾つか紹介しておきましょう。

**四六判・新書判**は、書籍独特の寸法で軽印刷の日常では、あまり見かけません。特に四六判はA5よりも少し小さく B6よりも少し大きい寸法(128\*188)なので、A5やB6と勘違いも多く、見積もりや発注には十分注意して下さい。表紙はA5用として先に作っているのに、本文は四六判だった！という事が時々起こります。いつもの無線綴であれば、少しバランスは崩れても、本のサイズは調整できますが上製やビニールカバー等は、それぞれの部門が完成品での組み立てなので、微調整以外はできません。

さて、書籍を印刷する際にとっても大切なのが【**背票せひょう&背丁せちょう**】です。総称して【**背丁**】と呼んでいますが、実は**丁合加工をするのに、とても大切な印です**。多くの刷り本には頁が印刷されていますが、時には頁が無いもの、又は順序よく頁が通し番になっていないものがあります。特に**糸綴り加工**は、1枚ずつ糸で縫い繋げる作業なので背中部分しか見えず、丁合いのミスが出たときに、どこに何頁があるのかわかりません。そこで**背丁が絶大な効果を発揮します**。これがあれば たとえ丁合いの順番が間違っても一目で見つけられ**乱丁や落丁防止に役立ちます**。また16頁折では、反対に折ってしまう(裏折)の事故さえも防止が出来ます。書籍を扱う製本会社の多くは、この背丁が無いだけで割増し料がついたり、仕事を断られたりする事も有るほど、**重要な印です**

**中綴り製本でも同様**ですが、この場合は背中に印でなく、天又は罫下の袋部分につけます(背中では、折が重なって見えなくなるからです) 現在でも大台で印刷をする多くの会社では、当たり前な事なのですが、軽印刷を多く手がける会社では、あまり浸透していないようで残念です。



## Teabreak

ヤクルトスワローズの前身はJR(旧日本国有鉄道)でした。国鉄が球団を持つ事になった時 名前の候補には強そうな「コンドルズ」が上がりましたが一部から国鉄がコンドル(混んどる)では聞こえが悪いと物言いが付き、そこでいつもゆっくり座ろうと「スワローズ」になったそうです。

by (株) 井関製本